

戴震と王引之

——『爾雅』同条二義の訓釈をめぐる——

黄侃は、王引之（一七七六—一八三四）の『爾雅』に対する研究に言及して、その中の注目すべき成果を「王引之の《経義述聞》、説《爾雅》者、凡三卷。其最精者、謂二義不嫌同条；如林雋為羣聚之羣、天帝為君上之君」と指摘している。『爾雅』の主なる訓釈方式は、一つの条項に同訓の被訓釈字を列挙し、最後に訓釈字を置くものである。ところがここでは、王引之によって、訓釈字が音近を条件として両義的に機能していて、同一条項の被訓釈字群の中にも同訓ではあるが、意味を別にするものが混在していることが詳しく説明された点を指摘しているのである。

この『爾雅』における同条二義という現象は、語義の訓釈を施すいわゆる辞書としては不合理な形式に思われるが、『爾雅』が古代漢語の意義構造の本質を把握した漢代訓詁学の「仮借」方面の成果を基礎として体系的に組成されたという可能性を十分に示唆するものであろう。

ところが、王引之が黄侃に「最精」のものと特記された同条二義の現象を分析した際、その対象にした『爾雅』の同じ諸条に対して、戴震（一七二四—一七七七）は全く対蹠的な見解を採っていたのであった。すなわち戴震の『爾雅』に対する基本的な認識は、先秦以来の訓詁の集積で、同訓のものをある程度整序したが、個々の条項は語彙論的な分析も加えられていない単なる雑纂にしかすぎない、とするものである。殊に問題となる点は、同条二義として認定された同じ条項を戴震が雑纂の不手際が著しく表れた部分であると判断して、その認識の根拠とすること

濱 口 富士雄

になった事実である。ところで同一の対象に対してそれぞれ全く別方向の判断を下すことは、一般的には特別奇異なことではない。たとえば帰属する学派や立場が違えば、その依拠する理論や認識の準拠枠組が異なり、当然ながら認識にズレが生じよう。しかしながら戴震は清代考拠学の中でも言語学的方面からの分析に優れた浙西皖派の祖であり、一方王引之は戴段二王と称されるごとく段玉裁や父王念孫とともに皖派の醇乎たる継承者である。しかも方法論上、古音及び声紐の音韻体系に依拠した「転語」の法に基づき古文獻を追究する立場は、一応大枠においては戴震と王引之とに共通したものである。したがって『爾雅』の訓釈の在り方に対する、戴王それぞれの分岐した認識は、同様の方法論を駆使する際の差異であつたり、判断材料についての知識の差といった底の連続的なことがらに由来するものではない。それは、現実を——ここでは『爾雅』の訓釈という現実をいかに認識するかという、その認識の背景をなす準拠枠組としての経学的立場の差異を予測させる。

そこで、『爾雅』に関する、特にその中でいわれる同条二義なる現象に対する戴震と王引之の見解の位相を手掛りとして、思想史上皖派という同じ系譜に帰属させられる戴震と王引之それぞれの考拠の在り方を明らかにし、そこから戴震から王引之への考拠学的展開の意味を考察してゆく。

まず、戴震の考拠の立場を『爾雅』を軸としながら検討してゆくことにする。

戴震はすでに若くして儒学における究極の価値を示すところの「道」と経書との関係、また、「道」の究明と文字・音韻・訓詁を包摂する小学との不可分な関係について確乎たる見解を持っていた。これは清朝の考拠学における重要な共通理念として周知されている言明に定式化されている。すなわち「経の至れるものは道なり、道を明らかにするゆゑんはその詞なり、詞を成すゆゑんは字なり。字よりもってその詞に通じ、詞よりもってその道に通じ、必ず漸なる有り」と端的に表現されている。

治経に対してこのように明快な立場をとる戴震にとって、古代の経書解釈や訓詁の淵藪である語義書としての『爾雅』が重要視されていたことは言うまでもないであろう。戴震は27歳前後に「爾雅文字考序」を書いている。現在、序文のみで本文は伝わらないが、『爾雅』研究にそれ以前からすでに十年間も没頭していたことが記されており、戴震の『爾雅』への対応の深さを窺い知ることができる。すなわち、

古の故訓の書、その伝はるものは爾雅より先なるは莫し。……余窃かに謂へらく、儒者の治経は、宜しく爾雅より始むべし、と。取ってこれを読み、心をここに殫くすこと十年。……それ爾雅を援きてもって詩書を釈し、詩書に拠りてもって爾雅を証す（夫援爾雅以釈詩書、拠詩書以証爾雅）。

と言うように、『爾雅』に訓詁書としての第一義的な価値を認めると同時に、戴震は自らの経解上の理念に照して治経における最優先文献であると認定した。しかも注目すべきことは、『爾雅』を単に経書解釈のための工具書と見做すことはせず、常に経書との間でフィードバックさせそれぞれが相互補完的な意義を持つと考えていた。つまり戴震はすでにこの時にあって、経書解釈という経学的営為の本質的部分は『爾雅』の

存在なくしては成立しえないことを洞察していたのである。この見解は50歳の時、任基振から彼の著『爾雅注疏箋補』のために委嘱された序文にも「爾雅は六経の通釈なり。爾雅を援き経に附して経明らかに、爾雅を証するに経をもつてして爾雅明らかなり（援爾雅附経而経明、証爾雅以経而爾雅明）」と記されているように、生涯にわたりその内実をほとんど変えることなく維持し続けていたのである。

戴震の治経上の方法理念からすれば、まさに六経の通釈としての『爾雅』に対する重要視は当然すぎるものである。しかしながら戴震はこの『爾雅』の経学的価値を認める一方で、『爾雅』に内在する問題点についても冷静に剔開するのであった。23歳の時、江永（慎修）に宛てた返書の中で小学に関する議論をしているが、その劈頭で『爾雅』の訓詁方式やその訓詁の意義を次のように論じている。

説文所載の九千余文、小学廃失の後に当たれば、固よりいまだ一古に合する能はず。即ち爾雅もまた多く拠るに足らず。姑く釈詁をもつてこれを言ふに、「台朕賚界卜陽、予也」のごとき、台朕陽は當に予我の予と訓ずべく、賚界卜は賜予の予と訓じ、一句中に錯見するを得ず。……これ皆掇拾の病なり（此皆掇拾之病）。その詩書を解釈するや、詞に縁りて訓を生じ、字義の本来に非ざるもの、一にし

て足らず（其解釈詩書、縁詞生訓、非字義之本来者、不一而足）。

戴震は『説文』に対しても「爾雅説文の二書は宝書なり」と発言していたごとく、『爾雅』ともどもに重要な小学書として対応していた。しかしそれは後漢の許慎の手に成るものであることから、文字を「古聖人の制作」と経学的に認識する戴震の立場からすれば、時間的な懸絶もあり、それらの制作の真実が示された「古」に合致するはずはなかった。同様に『爾雅』もその成立や内容については批判の余地があり、治経において無条件で依拠できるものではないと見た。その不備に関する具体的な分析が、後に王引之らにより同条二義と規定されることになった条項と重なるのである。挙例されたものは、台朕賚界卜陽の六語で、いずれも同訓であるとして、『爾雅』釈詁では「予」と訓じられている。しかし戴

震は、この六語が同一の意味をもつとして、一義としての「予」でもって訓釈することはできないとした。すなわち台朕陽は「予」われ、賁界トは「予」あたふであり、全く別々の意味（二義）であるから、本来は「台朕陽、予也」、「賁界ト、予也」と二条となるべきで、まさに「一句中に錯見するを得ず」のはずにもかかわらず、訓釈字が同じ字形の「予」であったことから混線して錯見することになったと分析する。戴震は他にも同じような例を二つ挙げた上で、一条の中に別義の語が錯見することになった原因を、『爾雅』の編纂法に帰着させる。『爾雅』は古の多くの訓詁を保存するが、それらを収集し整理する段階で、同じ訓釈字を当てられてはいるものの、意味上別義扱いするのが妥当なものへの配慮を欠いたまま、雑多に訓詁の事例を集めた（掇拾）ために問題点が露呈したのであると見た。しかも戴震は『爾雅』の不備として、その詩書などの経書に対する解釈に、表面上の言葉遣いや文字面によって勝手に文意を取り繕う語義を創り出すいわゆる「縁詞生訓」という治経上あるいは文献解釈上最も忌むべき態度に由来する、文字の本来義とは異なる用法が多く散見する点を指摘した。これは文字を聖人の制作と認識する戴震にとっては由々しき問題であった。

『爾雅』を六経の通釈と高く評価する一方で、一条に二義が錯見する点、文字の本来義を無視した語義が存在する点、この二つの問題点の存在によって『爾雅』を治経上依拠するに不十分であると、戴震は批判した。しかし問題は『爾雅』の現状それ自体にあるよりも、多くは批判する戴震の考拠学的立場の側にありそうである。一般に認識は対象に正しく従って形成されるというよりも、反対に認識の方が対象を規定してゆくものであるが、この場合もまさにそれに該当するのである。

そこでまず戴震が依拠しえないとした二点を整理してみると、それらの問題の本質は、同一の事象に根ざしていることが了解される。すなわち造字上の本義の追求ということである。一条中に二義が錯見する場合は、訓釈字が、その造字に由来する固有の本義と普通による仮借義とを両義的に機能させられたまま、双方によって訓釈された多くの訓詁の実

例が収集され、訓釈字の字形が同じである二義を混同したまま一条にしてしまったと見るのである。これは文字使用における仮借を訓釈字として許容したことに起因している。また「字義の本来に非ざる」もの場合は、ある文字が、経書解釈においてその造字のときに賦与された本義について正確に理解されないまま、その文字の引伸義や仮借義などのレベルで扱われて、経書の本来の文意や文脈を損っていることが往々あり、そうした訓詁が『爾雅』に収集されていると見る。こうした用字上の仮借義を排除し、経書解釈にあっては本義を追求しようとする戴震の視点⁽⁹⁾が、『爾雅』の現実に批判すべき部分のあることを告発させたのである。

そこで戴震の具体的な考拠の在り方の中で、この本義追求の視点を確認してみる。まず『詩経』小雅谷風「北山」の第二章「大夫不均、我從事独賢」の「賢」に関して、戴震は「賢」の本義は「多い」（賢之本義多也。从貝収声）であるとして、この意味で経文を解釈する。ところが毛伝には「賢勞也」とある。しかし戴震は、これは「賢は勞なり」と訓んで「賢」を「勞」で解し、「賢」の「多」義を排する訓詁ではなく、『孟子』万章上の経文に検証して、勞字がかえって「多」義を内容的に補充した訓詁であると見る。すなわち「孟子この詩を説きて曰はく、これ王事に非ざる莫し、我独り賢勞す、と。事に従ふこと独り多く、人は逸し己は勞するを謂ふ。……勞字を増成して、作詩の志を明らかにし（増成勞字、明作詩之志）……勞をもつて賢を解するに非ず（非以勞解賢）」と言う。さらに鄭玄の箋が字面通り「賢才」をもつて解釈するのを「尤もこれを失ふ」と強く否定する。そして経書解釈が、文字の本義において行われずに誤まられることを次のように概括する。

凡そ字には本義有りて、偏旁に属す（凡字有本義、属乎偏旁）。その因りて推広せる義は、皆六書の仮借なり。賢は本物数あひ校べて多きことの名なり。因って多才を謂ひて賢と為し、又専ら善行多きを謂ひて賢と為す。これ由り習ひて作字の初を忘る（由是習而忘乎作字之初矣⁽¹⁰⁾）。

ここにて確認しうる、戴震の考拠の背景をなす文字観は、文字の形体を

重視するもので、その本義とは、ある文字が造字された時点においてその字形自体に賦与された固有の意義を意味している。つまり文字の偏や旁に意味表示の規範性を期待するものであった。また戴震の「仮借」の用法は、いわゆる造字仮借のみならず、引伸義・派生義なども包含したものと なって、本義以外は「仮借」として一括してしまう本義志向の強さ、つまり文字使用における規範的立場の強さが窺われる。

また、同様の例として『詩経』周南「閟雅」の第五章「左右芼之」の「芼」についての考拠がある。毛伝は「芼は扱ふなり」、集伝は「芼は熟てこれを薦む」、『爾雅』は「芼は擣くなり」とそれぞれあい容れない解釈をする。戴震はいずれも「芼」字の艸に従う形体そのものに即して訓釈していい点を難じた上で排除し、しかも『説文』の字解も、この語句の文脈に合致せず、経意を反映しないものと批判する。そして戴震は『儀礼』『周礼』の経文に見える、肉汁で煮た野菜のあつものとしての芼の意味に注目する。これを採れば詩礼の経義が貫通し、また字形上艸の義にも背馳しないからである。すなわち次のように論じている。

三説皆辞に縁り訓を生じ、字の偏旁において明らかにするあたはず(三説皆縁辞生訓、於字之偏旁不能明也)。許叔重の説文解字もまたこの詩を引きて、艸覆蔓するなりと云ふ。又詩の前後において次を失ふ。大致経を説く者は、経に就いて傳合すれども、字に通ずべからず。字を説く者は、字に就いて傳合すれども、経に通ずべからず(大致説経者、就経傳合而不可通於字。説字者、就字傳合而不可通於経)。この一字を挙げて、訓詁の失伝の久しきを知るなり。これを礼の羹醢菹菜に考ふるに、凡そ四物、肉にはこれを醢と謂ひ、菜にはこれを菹と謂ひ、肉にはこれを羹と謂ひ、菜にはこれを芼と謂ふ。菹醢は生にてこれを為り、これ豆実と為す。芼は則ち漬もてこれを烹る。故に菹菜に別有り。これを芼すとは、用って銅、芼と為すを言ふなり。

ここで『爾雅』の訓釈も、文字の本義が帰属する偏や旁の意を包摂しえず、しかも経文での全体的なコンテキストにも適合しないことから、縁

辞生訓の事例として排斥された。すなわちこれは戴震の認識する、治経と説字とは究極的に合致するという経学的理念に背くからなのである。

文字は聖人の制作にかかる、と経学的枠組の中において認識している戴震にとっては、いわば当然のことからなる。これはまさに戴震の「字をもつて経を攷へ、経をもつて字を攷ふ(以字攷経、以経攷字)」とする治経上の方法理念の反映であった。したがってこの方法理念によって経学的真是は解明されるのであるが、それを充足させない対象は正当な解釈や訓釈であると認めることはできないのである。戴震は「芼」字に関する考拠をこうした条件を踏まえた上で行い、「野菜のあつものにする」意は、草冠の字形と撞著せず、この義において『詩経』の該文はもちろんその他の経書の用例とも通じるので、これが「芼」の造字の本義であるとみた。この方法理念の下に考拠を展開して導いた結論は、古来閉ざされてきた意味を発明したものである、と戴震は考えた。したがって「この一字を挙げて、訓詁の失伝の久しきを知るなり」の発言に、文字の本義の究明と経義の追究とを相互に往復させ検証し、その合致するところを経書解釈の完成を見る、戴震の自らの方法理念への自負と、古来より伝承された伝注や解釈は、その中の大部分が合理的に整備された方法論によってチェックされることもなく、かえって経義の真実を隠蔽する不備な訓詁として存在してきたことへの戴震の不信とが窺われよう。こうした認識が伏流となって、特に『爾雅』に見られる二義錯見という現象は、戴震にとっては全く非合理的なもので、それは杜撰な雑纂的訓詁の集積そのものに外ならず、『爾雅』それ自体が治経上無条件には依拠しえないものである、と判断される原因になったのである。

ところで戴震にはまた清代考拠字に決定的な影響を与えた音義一体の学説がある。これは古代漢語の音韻研究を背景として、音韻論上の転声規律と語彙の意味的体系との間に相関性があることを説き、語の音声と訓詁とを統合する見解である。戴震の説は25歳の時書かれた「転語十章序」に明らかにされている。その基調は「同声なれば、則ちもつてその義を通ずべし(同声則可以通乎其義)」と端的に表現される。戴震は

この音声と意味とを疏通させる転語の構想を、『爾雅』などの古来の訓詁書の訓詁状況の中には存在しない、全く新たな訓詁上の考え方であるとして、それらの欠如を補完するために『転語二十章』の著作を意図したとする（昔人既作爾雅方言积名、余以謂猶闕一書、創為是篇、用補其闕）。ここにも『爾雅』を雑纂的な訓詁の集積にすぎないとみる立場が鮮明に表れている。さらにこの音義一体説に基づく考拠においても確認しうることは、戴震の考拠姿勢に抜きがたく存在する、文字の本来としての本義や本字に即して経義が解釈され、経文が書記されることを期待する規範的見解の支配である。すなわち、

大致一字既にその本義を定むれば、則ちこの外は音義の引伸にして、咸く六書の仮借なり。……又胡遐何一声の転に因って、胡遐皆従って何と為る。……寧字の義、詩に伝する者これを失ふ。転語の法をもつて類推するに、寧の言たる乃なり。凡そ故訓の伝を失ふもの、

ここにおいてまた声に因って義を知るべし。⁽¹³⁾

本義以外は、「仮借」という前提において、音義一体に基づく訓詁が示されている。ここでは「一声の類」や「転語の法」という音韻論上の規律を根拠として意味の通用が決定されたのであるが、最終的にはその意味を担うべき本来の語として「何」「乃」なる規範的な文字を措定することで本義を了解するのであった。

二

つぎに、王引之の『爾雅』への対応を検討することを通して、その考拠の在り方を見てゆく。

王引之は『経義述聞』二六「爾雅上」の第一条で、『爾雅』积詁の第一条「林丞天帝皇后辟公侯、君也」の訓詁に関して分析し、『爾雅』における同条二義の現象を明らかにした。すなわち、戴震によって同一条項における二義の錯見として批判された現象を、古代漢語の音韻や意味の関係を無理なく反映させたものであり、しかも音韻・訓詁・文字が

それぞれ融合しかつ一定の秩序を保っていた古代の言語現実の姿そのものであると理解したのである。

それでは同条二義の論証を見てゆく。ただ挙例されている個々の事例については省略する。

君の字に二義有り。一は君上の君為り。天帝皇后辟公侯これなり。一は群聚の群為り。林丞これなり。古は君と群と同声なり。……徧く経伝の文を考ふるに、いまだ君を謂ひて林丞と為すもの有らざれば、則ち林丞の本訓の群為ること明かなり。天帝皇后辟公侯、君上の君為り、林丞、群聚の群為りて、しかるに合してこれを釈するを得るは、古人は訓詁の指、声音に本づき、六書の用、仮借に広む。故に二義同条たるを嫌はず（古人訓詁之指、本於声音、六書之用、広於仮借。故二義不嫌同条也）。下文の台朕賚界ト陽予也の如き、台朕陽は予我の予為り、賚界トは賜予の予為り。……義は則ち条有りて紊れず、声は則ち塗を殊にすれども同帰す。これ爾雅の訓詁の会通を為すゆゑなり（義則有条而不紊、声則殊塗而同帰。此爾雅所以為訓詁之会通也）。魏の張稚讓広雅を作りて、猶はこの例に循ふ。唐より以来、遂に能くその義を知る者有る莫し。⁽¹⁴⁾

王引之は初めに訓詁字「君」が同声であることを条件に君上と群聚との二義を包摂していることを確認した。すなわち通常の理解では、君上を本義とする本字「君」を、群聚の義が仮借して「君」字に統合され両義的に訓詁されているということである。こうした現象が可能である根拠を王引之は「古人訓詁之指、本於声音、六書之用、広於仮借」と提示した。つまり訓詁の指と称するごとく、単なる特異な現象と見做すのではなく、訓詁学上の原理に沿ったものであるとする。しかも「古人」を提示することで、それが『爾雅』成立時を含む古代訓詁学の普遍的な訓詁原理であったことを強調しているよう。さらに重要なことは、この訓詁原理が、戴震の音義一体の訓詁説を支えるものであり、段玉裁にも支持され特に父王念孫によって確定され、皖派において共有されていたのみならず清代考拠字の方向をも決定したものであったことである。王引之は

錯見の不備とした戴震の認識を、まさに戴震が依拠したものと同一訓詁原理に従いつつ覆えし、それによって古人の訓詁の真実を解明したと考えたのである。その意気込みは「唐より以来、遂に能くその義を知る者有る莫し」の発言に鮮かに表れている。

王引之の学が、父王念孫の訓詁理念を継承していることは贅言を要さぬことであるが、その父の考拠学の根源的な見解を説いた発言を記録している。すなわち「詁訓の指は、声音に存す。字の声同音近のもの、経伝往々仮借す（詁訓之指、存乎声音。字之声同音近者、経伝往々仮借）。学者声をもつて義を求め、その仮借の字を破して、読むに本字をもつてせば、則ち渙然と冰解す。もしその仮借の字にして、強いてこれが解を為さば、則ち詰窮して病と為る」とあり、音声の近同を契機として経伝に仮借が多く、訓詁は書記されている字形を越えて、音韻的見識をもつて究明すべきことが示されている。王引之はこの家学を承けて25歳の時に古人の名と字とが意味的に相関する事象を研究し『春秋名字解詁』を著したが、その叙文に次のように言う。

それ詁訓の要は、声音に在りて、文字に在らず。声の相同相近のもの、義毎に甚しくはあひ遠からず（夫詁訓之要、在声音、不在文字。声之相同相近者、義毎不甚相遠）。故に名字あひ沿ふも、必ずしも皆その本字ならず、その仮借するところ、今韵また異音多し。字体を画してもつて説を為し、今音を執りてもつて義を測れば、斯ち古訓においていまだ達せざるところ多きは、その要に明らかならざる故なり。……またもつて声音の統貫を究めて、詁訓の会通を察せんと欲すとしかいふ（亦欲以究声音之統貫、察詁訓之会通云爾）。

この叙文に見られる詁訓の理念は、父王念孫の見解を完全に咀嚼している。すなわち王引之は、詁訓の本質は、文献上の書記形式である字形に拘束されることなく、その書記された文字が情報として示す音声に依つてその文字に賦与された意味の追究を図ることであるとした。要するにこうした理解の根柢には、経書をはじめとする古代文献の現実、規範的な文字使用が貫かれていたわけではなく、声同音近という音声上の条

件の下に文字の仮借的用法がかなり頻繁であったという認識があった。しかしここで声音とあるのは、古代漢語における音韻を言うのであって切韻系の今韻に依るものではない。すなわち王引之は、清朝の古音研究を系統的に研究し、王念孫からもその古音二十一分部を直接に教授されており、しかも未完成ではあるが王念孫が古声紐と意味との体系性を研究した「釈大」の論文などの影響を受けて、古代漢語の音韻体系に関しては深い認識を有していた。この今韻とは異なる古代音韻の体系の下での音声の相似や転音に関する理解が、古代文献の仮借的用法を鑿空なる望文生義を排して順当に打破する手続たりうるのである。表記された文字の字形に固執したり、古音に関する理解が欠如したまま文献に当ることは古訓の了解に間然する在り方であって、王引之は、詁訓の本質は古代音韻の体系性（声音之統貫）の認識を前提すること、そうしてはじめて古代の文献上における仮借的用法や一見不合理と思われるような訓詁方式の実態の裏に潜む古の詁訓の無碍なる構造（詁訓之会通）が明らかになると理解したのである。

したがって王引之は「君一群」をはじめとする同条二義の訓釈が施されることの理由をここに見たのである。詁訓の本質は、文字の形体に基礎づけられているのではなく、古音古声紐の音韻体系に基づく音声上の規律性に依存する。この認識をもつて、経書及び古文獻での六書によって構成された漢字の使用状況は、造字の本義を離れて、音韻上の転声や通用の規律を最大限度の枠とする仮借によってその書記形式としての可能性を拡大しているという現実を直視した場合、同条二義は決して排除すべき訓釈ではないのであった。

また王引之は、この現象が特殊なものではないことを、『爾雅』の「台朕賚界卜陽、予也」以下九例で実証し、また詁訓書としての『爾雅』が、意味的側面でも声音的側面でも音韻体系を根柢に据えて、整齊たる秩序と関係性を保っており、まさに「詁訓の会通」であることを確認するのであった。すなわち王引之は、あらかじめ文字はその本然の字義によって使用されるべきであるといった観念をもつて『爾雅』の詁訓に文字

の本義の検証を期待することはなかった。『爾雅』の訓詁の実態に即して分析し、結果的にそこにあたかも戴震が『軋語二十章』に構想したのと同様の、意味と音韻との密接な相関性が内在していることを、同条二義現象の解明を一つのキッカケにして明らかにしたのである。

ところで訓詁の本質は声音に本づくという王引之の考掘理念の根柢には、語彙における意味的構造は音韻論的体系を下敷にしており、訓詁も古代の音声言語に還元してこそ真正なものとなるとする音声言語そのもののへの正当な評価がある。そして現実の文献上の仮借の背後にまで廻り込み、それが音声言語を軸としつつ文字の表音機能に媒介されて成立していることを看破し、文献解釈に際しては、本字本義という文字の規範性に呪縛される必要はないとする。これは文字の形体に対する克服である。王引之は仮借について次のように論じている。

蓋し本字無くして、しかる後他字を仮借す。これ文字を造作する始めを謂ふなり。經典の古字、声近にして通ずるに至りては、則ち字無きの仮借に限らざるもの有り。往々本字見存すれども、古本則ち本字を用ひずして、同声の字を用ふ。学者本字に改めてこれを読めば、則ち怡然として理順ひ、借字に依りてこれを解せば、則ち文をもつて辞を害するなり。⁽²⁰⁾

また次のようにも発言している。

仮借の法、由来旧し。その本字、十に八は求むべくも、十に二は求むべからず。必ず本字を求めてもつて仮借字を改むるは、則ち考文の聖の任なり。⁽²¹⁾

すなわち王引之は、仮借に対して戴震のごとく字義の本然以外の引伸などを含ませることはせず、もっぱら音声上の問題として分析する。第一は本字のない造字仮借である。第二は經典における文字使用で、本字があるにもかかわらず、同声の別字を借用する用字仮借である。ところで王引之は、仮借を破字し本字を確定する営為を「考文の聖」⁽²²⁾の任務であると断言したが、これは王念孫も『広雅疏証』の考掘において仮借字によって表示された意味の解明はしても、その仮借字の本字が何になる

かを判断せず、慎重な対応をしたごとく、極めて困難であった。本字の確定が八割は可能で、二割は困難であるとの記述は、王引之が用字仮借に二つの層があると考えていたことを示している。第一は、声同音近であることのみをもって仮借した、いわゆる同音借用字。これは実際の文字使用において仮借であるか否かを判定する困難さはあるが、一たび仮借と了解した場合は、本字の指定はある程度可能である。本当の困難さは第二の音も意味もほぼ通じあう文字を仮借した、いわゆる同源通用字にある。⁽²⁴⁾この場合どちらが本字か仮借字かを決定することは殆ど不可能なのである。しかし本字志向の戴震は敢えてこれを断定する考掘を行ったので王引之から批判を受けるところがあった。すなわち『尚書』堯典「光被四表」の光字に関して、それは本来横字であったはずが「横転写して桃と為り、脱誤して光と為る」とした戴震の会心の考掘を、王引之は同源通用字のレベルで次のように言う。

……則ち光彼の光、横に為り、また広に作る。字異れども声義同じ。これを是としてかれを非とするを煩す無かれ（字異而声義同。無煩是此而非彼也）。⁽²⁶⁾

とあるように「声義同」をもって本字仮借字の判断を中断し、通用字として対応している。また、

平と弁と独り声音あひ近きのみに非ず、抑もかつ訓詁あひ同じ。これを是としてかれを非とするは、ただ一偏の見のみ（是此而非彼、抵一偏之見也）。……それ古字の通用は、声音に存す。今の学者、これを声に求めずしてただこれを形に求む（夫古字通用、存乎声音、

今之学者、不求諸声而但求諸形）⁽²⁷⁾。

さらに王引之は、先に見た戴震の「左右毛之」の毛字の考掘を字形と本義に拘わるものと見做し、同源通用のレベルから次のように破字した。

それ訓詁の旨は、声音に本づく。その由るところを探るに、実に同じく条貫す。周南閟睚篇左右毛之の如き、伝は毛を訓じて扞と為すも後人従はず。しかうして毛苗声近く義同じきを知らず。左右毛之の毛、伝もつて扞と為すは、猶ほ田苗蒐狩の苗のごとし。白虎通も

って扱取と為し、爾雅の毫は毫なりもまた扱取の義とあひ近し。⁽²⁸⁾
これは毫に対して苗が声近義同で同源字どうしであることを提示し、そこでそれぞれに共通する意味の来源を追究することで、改めて毫の訓詁を確定するものであり、いずれが本字かの詮議は無意味なのである。

王引之のこうした仮借および本字に対する認識が、『爾雅』の同条二義の現象を、訓詁の理に適った方式であると判断する支えとなっていたのである。

王引之は以上見てきたように、自らの訓詁理念の下で、この同条二義の現象が訓詁方式として排除されるべき不整合なものであるとは考えなかった。しかもその上こうした同条二義のような記述法が、『爾雅』における特殊な例——そうであればまさに雑纂である蓋然性が大となる——ではなく、経書の記述の一般性の中に位置づけられることを示したのであった。

まず王引之は、『爾雅』を雛型とし、さらに訓詁の増補を行った魏の張揖の『広雅』にも同条二義の訓詁例があり、それは『爾雅』に従ったものと考えて、その当時の言語あるいは訓詁状況にあって決して不合理であるとはされなかった証例と考える。なぜなら張揖がもしそれを単なる寄せ集めと理解したならば、その形式を踏襲することはなかったはずであるからである。王引之は父王念孫の『広雅疏証』の著述を手伝い、その多くの事例を確認した上で、「魏の張稚讓広雅を作りて、猶ほこの例に循ふ」に対する割注に「かくの若きの類、枚挙すべからず」とまで称している。さらに王引之は、同条二義の形式が訓詁方式としてのみならず一般的な記述形式に吸収しうることを示し、それが掇拾ではないことを確認する。すなわち「通説四十余事、又説経の大なるものにて、述聞の末に在り」⁽²⁹⁾と言われる『経義述聞』『通説』の「経文上下両義不可合解（経文の上下の両義は合解すべからず）」の項に、同条二義の一部が事例として挙げられている。

経文の上下の両義なるは、これを分てば則ちその所を得、これを合せば則ち扞格して通じ難し。……爾雅釈詁、林丞、君也は、君を借

りて群と為す。天帝皇王后群公侯の君と字同じなれども義異なる。
しかうして解する者誤って合して一と為す。⁽³⁰⁾

つまり多くの経書中に、うかつに対応すれば合解してしまう記述形式が存在しており、『爾雅』の例もそれに外ならないと判断したのである。戴震の場合、合解することなく分けて解釈しえたのであるが、経書の全体的な事例の中で触類旁通して、その事例を検討することがなかったため、不合理な形式であると批判せざるをえなくなったのである。

このように常に全体への見通しを考掘の視野の中に入れておくことは王引之には当然の在り方であった。すなわち、

経を解する者、全経の例を考へざれば、宜なるかな多方推測すれども、卒に一当も無きこと（解経者、不考全経之例、宜乎多方推測、而卒無一当矣）。⁽³¹⁾

と、経書全般の事例への配慮がない考掘は、正当な理解を得ることができないとし、さらに

経の説有るは、触類旁通し、全書に通ぜざれば、一句も説く能はず、諸経に通ぜざれば、亦一経も説く能はず。⁽³²⁾

と断言する。

王引之はこれらのことから明らかなごとく、同条二義という現象を支持するのに、自らの考掘理念をもって正面から対応し、しかも問題多き文献上の現実を排することなく、常にそれを取り囲む全体状況への確かなる認識をもって考掘を展開していたのであった。

三

経書解釈の方法論において小学を根本に据える戴震及び王引之にとつて、古来よりの訓詁を保存し漢代の経師が釈義の根拠とした『爾雅』が重要な訓詁文献であったことは明らかである。しかしながら考掘学上の方法理念を共通にしていたと目される両者ではあったが、すでに考察してきたごとくこの『爾雅』への対応には、相当の隔りがあった。その分

岐点となったものが、いわゆる同条二義の現象であった。戴震はこれを「掇拾」による雑纂に由来する不合理なものと思倣し、『爾雅』それ自体の訓釈への不信となり、自らの音義一体の認識に基づく訓詁理念の構想を『爾雅』を措いて、『転語二十章』に求めざるをえないことになったのであった。一方王引之は、古代漢語の意味構造はその音韻体系に基づいて整齊たる秩序を保っているとの認識の下に、いわゆる仮借にはこうした古代漢語の音義関係が合理的に反映されており、同条二義はその支持による訓釈方式であったと見た。したがって『爾雅』は古代漢語の音義関係を踏まえた「訓詁の会通」であるとして、考拠上での重要性が再確認されることになったのである。つまり同じ現象——ここでは『爾雅』に現れる一部の訓釈方式が、異なって認識されたということは、対象自体の実情に正確に従って戴震や王引之の認識が規定されたというよりも、逆にそれぞれの考拠理念や準備枠組に支えられた認識の方が対象に投影し、対象を規定したのであった。

それではまず戴震の掇拾の病とした結論が、その考拠において必然的に導かれることになった経路を見てゆく。

侯外廬は戴震を十八世紀の啓蒙思想の中に位置づけたが、戴震の思想とその考拠とは、まさに啓蒙思想の図式に符合する。啓蒙思想の基本理念は、脱呪術化と合理的方法論の二点にあると言えよう。反朱子学における形而上学の否定は前者に沿うものであり、しかもこれは朱子学的リゴリズムの批判と人欲の肯定という世俗化の契機を内在させており、文字通り啓蒙思想の範疇にある。方法論に関しても、改めて言及するまでもなく考拠学を支える理念として定式化された「字↓詞↓道(理義)」という実証的合理的手続に経書解釈をゆだねた。すなわち九類二十五部の古音体系や転語二十章における古声紐と訓詁との相関性の追求、文字については『説文』の解字を越えた造字本義の追求など、経書解釈を文字音韻訓詁という小学つまり言語研究を基礎に据えた実証的手続に還元したのであった。そのみならず「僕以爲へらく考古には宜しく心平かなるべし。凡そ一事を論ずるに、人の見をもって我を蔽ふなく、我の

見をもって自らを蔽ふなれ」と言うように、古典研究における合理的姿勢を明確に自覚し、伝統や権威における実証なきものの排除と自らにおける先入見などの克服を求めている。このようにして「道」のあるがままの解明を目的とした実証的かつ合理的方法規律の充実は、その考拠の客観性を高めることになったが、戴震の考拠学の実証性の追求は却ってその「道」を絶対化する自らの経学的方法理念に足をすくわれることになったのである。

すなわち方法手続に客観的な合理性を主張するならば、その方法手続とそれが適用される対象領域との間に明確な同一性が示されなければならない。もしその合致がないならば、いかに方法論それ自体が合理的であり実証性を有していたとしても、不適合の対象については何らの確実性も保証されないはずである。戴震の場合、小学という限定された対象領域においてはその方法規律の有効性は多大であった。文字では六書に基づいた造字本義が漢字の字形や偏旁に反映すること、音韻及び訓詁では、今音古音を貫通する音韻体系として析出した九類二十五部や転語二十章に内在する転声規律は客観的法則であり、それを根柢に据えた音義相関説による訓詁は、実証に耐えうること、などを踏まえた方法論は、小学レベルにおける問題の解決には自から実証的かつ合理的に機能するのである。そしてこのように限定された対象領域である小学での個別問題における有効性の積み重ねから推論して次第に小学を越えた領域における有効性が読み込まれてしまうことになる。いわば特定の対象領域で実証されたにすぎない事実が、すべて普遍的な客観的事実であると読み込まれてゆき、それが古聖賢の真実であり、朱子学的形而上学を克服するものであるとの確信が付加されることによって、本来小学あるいはそれに基づく釈義の領域のみでの実証性が、適用可能領域か否かの審問を経ないまま、価値的存在である経学世界においても成り立ってゆくものと確信されてしまった。つまり「字↓詞↓道(理義)」と定式化されたごとく、すべては連続しており、小学領域における方法論の合理性は、経学世界においても保たれると見倣された。ここには「自然」と「必

然」とを不可分とする戴震の基本的認識、つまり事実（自然）から価値を引き出す自然主義的経学観が背景をなしているのである。方法論の拡大適用は、経学的世界を秩序ある統一的全体的存在であるという前提によって行れたものであるが、当然のことながらこれは実証とは無縁のもので、アプリオリな信念とも称すべき経学観に由来する。さらに形而上学克服すなわち反理学の実現は方法論の確立に在ることから、戴震は方法論に対して一層の純化を行なった。そして殊に小学領域における検証に堪えうる客観事実の獲得は方法論の有効性の指標となり、さらに進んで方法論それ自体が絶対化すなわち物神化されることにもなっていた。戴震の考拠における方法論の一人歩きと対象領域の経学世界全体への拡大とが、「字をもって経を攷へ、経をもつ字を攷ふ」との言明を現出させたのである。戴震はその経学観の下に、文字は聖人の制作であるとした。六書を造字原理とする漢字はその字形をなす偏旁に経学的秩序と相關する意味的構造が潜まされており、また漢字は経書や文献の記述単位でもあるから、治経の根本であるとした。一方では経義をもって文字の本義を検証することで、認識を経学の世界に閉ざし、そこに完結させて、その中での合理的な理解の追求と検証による実証性の確立を図ったのである。したがって戴震の考拠にあつてはその経学的立場から対象が裁断され、その考拠手続に馴染まない対象は回避されることになる。すなわち『爾雅』の訓釈方式である、いわゆる同条二義は、造字本義に依る規範的用法とは別の論理に従うものであったことから、戴震の考拠における合理性からズレることになり、それを含む『爾雅』の全体の訓詁現実も統一的秩序を内在させない雑纂として見做されることになったのである。

王引之はこの戴震の見解を覆して、同条二義が古代漢語の音義関係を巧みに反映させた訓釈方式であることを解明したが、それを導いた王引之の考拠の在り方について以下見てゆく。

王引之の考拠は、戴震によって方向づけられた小学および音義相関の理論を基礎とするもので、その根柢をなす音韻論に関しても独自の説を

打出して、その考拠の内実を特別なものにしていたわけではなかった。古音方面では主に王念孫の二十一分部説に準拠し、声紐の方面でも「一声の転」や転声に関する認識は、戴震の見解と大きな差異はない状態であった。⁽³⁴⁾すなわち考拠の手続といった形式的な側面は戴震の考拠学の延長上に位置していたと言うべきであるが、その内容に関しては、王引之の音義相関説を中心に据えた考拠の展開は、戴震の考拠をほりくずしてしまっていたのである。すなわち戴震の考拠は、専ら小学レベルのみでの実証可能な領域に局限して成立したものではなく、その経学理念よりの要請があった。経書において開示される経学の世界は、秩序ある統一体であり、あらゆる規範の根源となる合理的存在であると実証を超越した非合理的な直観によって見做し、自然としての道の実現はとりもなおさずそのまま経学的価値つまり規範としての理義の実現であると、戴震は認識したのである。こうした認識下ではすべての事象はその秩序に沿うと考えられ、小学もその例外ではありえず、文字の形体や音韻論や訓詁現象への規範的立場からの分析が行れるのは当然であった。

ところが王引之は、事実と価値―規範とが未分化である戴震の考拠には、経書の事実を追究すればするほど規範的現実が強まり、かえって経書の現実を後方へ押しやり、事実から遠ざかってしまうという逆説的構造が内在することを看破したのである。『爾雅』の訓釈の現実が戴震の訓詁的規範に照らした場合、受け容れることのできないものとなり、その現実が雑纂以上のもものではなくなっていたわけである。

したがって王引之は、治経を事とする儒学者としての立場を堅持しつつ、戴震のごとき逆説的考拠を回避し、経書の本然に直接アプローチしうる考拠手続つまり合理的客観的な考拠方法を確立するために、考拠手続から規範的要素を排除することにしたのである。価値判断や規範性は本来主観的な領域に属するもので、考拠手続のようなものとははじめから没交渉のものであるからである。王引之は自らの立場をつぎのように輿自珍に語り、その考拠的立場を明らかにしていた。

吾の学、百家においてははまだ治むるに暇あらず、独り経を治むる

のみ。吾の治経、大道においては敢へて承けず、独り小学を好むのみ（吾治経、於大道不敢承、独好小学）。それ三代の言語と今の語言とは、蒸・越のあひ語るがごときなり。吾小学を治め、吾これが舌人と為る。その大婦は、小学を用つて経を説き、小学を用つて経を校す（用小学説経、用小学校経）と曰ふのみ。

まず注目すべきは王引之が経学上の「大道」を家学として王念孫より継承することはせず、自ら進んで基礎学である言語学関係の「小学」のみを修めたとの言明である。これは王引之が自らの考拠学においては小学に全面的に依存し、経学の「大道」を考拠の目的としては設定するものの考拠の合理的客観的手続の過程に介在させることなく切り離そうとしたことを意味している。方法としての考拠の営為において、対象領域を小学に限定することで実証可能な合理的手続となりうることの保証を求めたのである。もしも価値判断としての「大道」を考拠の対象に無制約的に包摂した場合、考拠方法と対象領域との適合性が曖昧になってしまうのである。こうした事態においてその方法手続がなおも対象に対し合理的であり有効であることを主張するためには、本来方法手続によって解明されるべきはずの究極的目的である「大道」そのものの価値に先行的に依存して、方法手続を規範的に純化させることより外になくなってしまふのである。そして文献としての経書の現実をあるがままに対象化し、そこに記述された経学的事実を解明するというよりも、超実証的に信じた「大道」によって経書の記述を規範的に選び取る状況に陥るのである。すなわち王引之はこうした事態の回避を計るため「大道」の切り離しを敢えて言明したのであって、それによって『爾雅』の一見不合理に見える同条二義現象をも、古漢語の意義相関や仮借の本質を把握することで正当に認識することが可能となったのである。

これは王引之が、経学の実を經書それ自体の記述から直接的に了解するための保証を求めて、考拠手続の合理性が維持される一定範囲内つまりは小学という音韻体系において客観的な統一秩序を検証しうる領域内に積極的にそして禁欲的に止まろうとした、その考拠手続に対する

節度の現れである。ここにおいて王引之は自らを三代の言語により記述された経書の言語現実を、後世的な付加要素を介入させることなく直接的に今に伝える「舌人」³⁸⁾と規定し、その考拠の本質を「用小学説経、用小学校経」と表明したのである。単純化して言うならば、戴震の考拠は「小学↑経」のごとく経学の認識を大前提として取り込んでおり、それによって小学レベルでの成果の経学の意義を保証しつつ、小学を治経の手続とする循環論の中に在ったが、王引之の考拠は「小学↓経」のごとく経学認識つまりは「大道」の先行的理解を切り離し、飽くまでも目的として指定するのみで小学は経に対する解明手段として、その自律的な位置を明確にしたのであった。

したがって王引之の治経上の目的は、経書に記述された経義への直接的アプローチであったから、それを阻碍する要因に対しては徹底的な批判をしたのである。漢代の訓詁学は治経において絶大な貢献があり、『爾雅』の成立もそれに依存し、また考拠学の基本である小学の素材はほとんどその成果に負うところであるが、治経の本質を逸して、この漢学を物神化する傾向を示した惠棟以下のいわゆる呉派の「漢学」が王引之の批判の対象となるのは必定であった。

惠定宇先生、考古は勤むと難ども、識高からず、心細やかならず、今に異なるものを見れば、則ちこれに従ひ、大都是非を論ぜず。……（焦循の指摘は）漢学を株守して、是を求めざる者をして爽然自失せしむるに足る。³⁹⁾

呉派漢学への批判は、遙かに時間的に隔絶した古代の文献である経書の現実を克服するために、古により近い時代の釈義訓詁としてののみ尊重したはずの漢儒の訓詁に埋没してしまい、本来の目的たる経書の真実の追求が等閑視されたことへの批判であった。それはまた王念孫の治経の在り方を語る記述にもほぼ同じ内実をもって示されている。つまり、その認識こそが王引之自身の治経上の立場であり、「漢学」と規定されたり、あるいは自らの批判的検証を経過しないまま「大道」として提示されたりするような、経学の実の直接的な了解を阻むものからの自由が要請さ

れたのである。すなわち、

大人また曰はく、経を説く者は経意を得るを期するのみ（説経者期於得経意而已）。……故に大人の治経や、諸説並列すれば、則ちその是を求め、字に仮借有れば、則ちその説を改む。蓋し漢学の門戸に孰（たゞ）かなれども、漢学の藩籬（はんり）に固はれざる者なり。³⁹

この「経意を得るを期するのみ」は、伝統や權威などのいかなる介在者も許容することなくひたすら経書の真実の直接的了解を追求するものであって、王念孫の発言ではあるが、延いてはそれを受け取め記述した王引之の考拠理念そのものでもあった。したがって王引之は『爾雅』の同条二義の訓釈が成立する契機でもあり、経書に普遍的に用いられている「仮借」を説明する立場をつぎのように表現している。

借字の古音に由りて、もって同音の本字を考ふ。ただ経文に合するを求めて、敢へて旧説を株守せず（惟求合於経文、不敢株守旧説³⁹）。すなわち王引之にとって、漢学株守への批判と経書そのものの記述の直接的了解とは表裏をなすものであって、そのためにこそ考拠の方法論の論理的整合性が強く要請され、「大道」からの分離を敢行して客観的には実証しえない価値的要素から考拠手続を解放し、経書の記述へ直結することを期したのであった。

ところでここに問題がある。本来経学としての考拠学であるにもかかわらず、「大道」を承けず「小学」を好むとする王引之の発言は、「大道」を切り捨て「小学」を独立させた脱経学あるいは言語学への転換を意味しているとの評価を生むことである。しかしすでに考察してきたごとく「大道」の分離は方法論としての考拠手続の整合性の追求の下に要請されたものであった。つまりあらかじめ「大道」としての一定の観念を刻印されることを拒絶し、「経文」だけを判断の拠り所とする立場に徹した上で、小学を手段としつつ「説経」「校経」を十全に実現させることによって、はじめて究極的な目的である「大道」への接近が可能であると考えているのである。したがって決して「大道」を切り捨ててはならず、その考拠的営為は「大道」に連続するのである。王引之に

とってこの「大道」は先行的にあらかじめ観念しうるものではなく、飽くまでも正当な方法論の行使によって初めて解明される経学的真実であるべきことを自らに厳しく要求したのである。発言を仔細に見ると明らかのように、王引之は諸子類や史書への深い研究がある事実を反して「百家においてははまだ治むるに暇あらず」と控え目に称し、その実態と表現との間のギャップを知る者に、治経において要求される周縁的学問である諸子学の水準は、なおざりの高さではないことを示したのである。それを承けて「大道においては敢へて承けず」も同じレトリックであると考えられる。したがって、これも文字通りの意味ではなく、表現とは逆にその内実は経学の究極的な目的である「大道」への深い思い入れがあり、それが軽々に論じられることへの強い牽制の意が込められてもいよう。さらにまた王引之にとつての求是の内容は、経学的真実の追求であって、それを突き抜けた言語学上の法則や理論としての真実ではなかった。考拠の過程において附随的に多くの優れた言語学的事実の解明がなされても、そこに王引之の究極的な目的があったわけではなくその目的に沿わない言語学上の問題は一顧だにされなかったのであるから、それをもって王引之が言語学研究の道を進みはじめたと見ることは問題が残るであらう。

以上、『爾雅』における特異な訓釈方式である、いわゆる同条二義に対する戴震と王引之の見解の相異を手掛りとして、それぞれの考拠の在り方を見た。戴震の場合、依傍することなき考拠を標榜したが、その考拠手続に経学理念を介在させることによって、もともと朱子学的形而上学を克服することを主要な目的の一つとして整備したはずの方法論が、皮肉なことに逆に「形而上学的治学方法」に転化してしまい、対象を裁断する傾向を露わにさせる状況になってしまった。一方、王引之の場合には脱経学かと考えられてしまうほど考拠手続から経学的な内実を分離して、方法論の合理化を徹底させた。それによって戴震が陥った方法の形而上化を防遏しえて、しかも「経文に合するを求むるのみ」の立場に即したかたちで、経書それ自体が内在させるあるがままの意味を実証的に

了解してゆく考拠手続を確立したのであった。ところが方法論のみに限定して言えば、これまた皮肉なことに王引之が治経における合理性を徹底的に追求した結果、一応その考拠手続の合理性は確立したのであるが、それはもはや治経としての考拠という枠組からすり抜けた内実を持つようになっているのであった。

《注》

- (1) 黄侃「爾雅略説」論清儒爾雅之學下、『黄侃論學雜著』中華書局、一九六〇、三七頁。
- (2) 同条二義の現象については訓詁關係の文献において多く言及されており、黄侃述・黄焯編『文字声韻訓詁筆記』（上海古籍出版社、一九八〇、三六—三九頁）には、宋の陸佃（師農）『爾雅新義』が初めて指摘したことを明らかにする。張永言『訓詁学簡論』（華中工学院出版社、一九五五、二九—三九頁）では、この現象の生じた理由を①同義語で文法機能の違いがあること（同詞異類）②一語の多義性（一詞多義）③同字である別語（同字異詞）の三項に分析し、その脚注においてこの現象に論及した諸文献を列挙している。
- (3) 「与是仲明論学書」、『戴東原集』九（湯志鈞校点『戴震集』上海古籍出版社、一九八〇）による、一八三頁。段玉裁の『戴東原先生年譜』によれば、この見解はすでに17歳のときに自覚されていたのであり、以後戴震の考拠理念として維持されていたものである。
- (4) 「爾雅文字考序」、『戴東原集』三、五頁。
- (5) 「爾雅注疏箋補序」、同右書三頁。
- (6) 「答江慎修先生論小学書」、同右書三—三頁。戴震は該文とはほとんど同趣旨の記述を『詩経補注』二、『經考』五「爾雅」（『戴東原先生全集』大化書局、民宅、一八頁および四七頁）にしている。この点からも同条二義の訓釈をもって『爾雅』の「掇拾」を確信し、その訓詁に対する不信を決定づけられたことが窺れよう。戴震は『爾雅』に続く『小爾雅』『広雅』の訓詁書をも掇拾をもって欠陥としている。「書小爾雅後」、『戴東原集』三、五—六頁に「小爾雅一卷、大致後人皮傳掇拾而成、非古小学遺書也。……張揖作広雅……其掇拾之病、与小爾雅同」としている。
- (7) 魏建功「戴東原年譜」（『国學季刊』二二—二四頁）に程瑤田の語として

「昔吾友戴東原語余云、爾雅、説文二書、宝書也」と引用する。

- (8) 「与是仲明論学書」、『戴東原集』九、八三頁に「漸觀古聖人制作本始」とある。戴震の小学に対する経学上の意味づけについては拙論「戴震の考拠」（『秋田大学教育学部研究紀要』三六集、二〇〇六）ですでに論及してある。
- (9) 「文字声韻訓詁筆記」二六頁に「清世自戴震創求本字之説、段玉裁注説文、遂有意推求本字。惟本字、本義実不易断」と記されているごく戴震は本字および本義をもつての経解に重きをおいた。
- (10) 『毛鄭詩考正』二（『戴東原先生全集』、四六頁）。
- (11) 『詩経補注』一（『戴東原先生全集』、一七頁。また『毛鄭詩考正』一、二三頁にも「毛」に関する同じ趣旨の考拠が見える）。
- (12) この文字と経との相互補完的な治経理念は、戴震が段玉裁に語った言明として陳煥（煥）によって記録される。陳煥はこれが段玉裁の考拠に大きく影響し、また王念孫にもそれが及んでいると見、戴震の考拠の根本的立場であると考え一度にわたり記録している。「説文解字注跋」（『説文解字注』芸文印書館、民宅、七六頁）に「煥聞諸先生（段玉裁）曰、昔東原師之言、僕之学不外以字攷経、以経攷字。余之注説文解字也、蓋窃取此二語而已。経与字未有不相合者、経与字有不相謀者、則転注假借為之枢也」とあり、また「王石臚先生遺文編次序」（羅振玉輯『高郵王氏遺書』）に「段先生曰、余之治説文也以字攷経、以経攷字。大指本微郡戴氏。高郵王石臚先生淵源同出乎戴、故論学若合符節」とある。
- (13) 「論韻書中字義答秦尚書蕙田」、『戴東原集』三、五頁。
- (14) 高郵王氏四種之三『經義述聞』二六、江蘇古籍出版社、一九八〇、六二—六三頁。本書は王引之が序文で父王念孫から聞いた経義に関する議論を祖述し、さらに自らの見解も補入したと云っており、王引之の著作とされる。その所説は文中で「家大人曰」と「引之謹案」と明確に区別され分明である。しかしながら一説によると本書はすべて王念孫の手になるもので現行「引之謹案」は原手稿では「念孫案」となっていたという（孫雅長「王念孫『義通』説箋釈」、復印報刊資料「語言文字」中国人民大学書報資料社、一九八〇、一三—一四頁の注②）。原載「貴州民族学院報」、一九八四（総四）。現行『經義述聞』の成立には、何回かの改訂があり、王引之の『春秋名字解詁』なども増入されている点から勘案して一応「引之謹案」の部分に関しては王引之の見解であると見て考察してゆく。

(15) 黄侃『文字声韻訓詁筆記』四頁には端的に「戴氏之於小学、可謂能集其成。其軋語序一書、實可鑒古括今、後戴氏之學人無能出其範圍者。……至東原戴氏、小学一事遂確立楷模。段氏王氏為戴氏弟子、段氏則以聲音之道施之文字、而知假借・引伸与本字之分別。王氏則以聲音貫穿訓詁、而後知聲音訓詁之為一物」と評している。王引之はこの王念孫の見解を継承し、その考拠において一層徹底的に応用したのである。

(16) 王引之『經義述聞序』、『經義述聞』卷首、二頁。

(17) 同右書三、七二頁。

(18) 「与夏遂園書」(『王文簡公文集』四、『高郵王氏遺書』所収)には「引之弱冠以後、読顧炎武『音學五書』・江(永古韻標準)・段(玉裁『六書音均表』)三先生書、折衷於家父毛詩九經音、而窺古韻之都凡」と言い、また「經義述聞序」には王念孫から「古韻二十一部之分合、說文諧声之義例、爾雅方言、及漢代經師訓詁之本原」を教られたことを記している。

(19) 同条二義の訓詁について王引之のように音声上の「仮借」をもつて理解するのには止まらず、さらに二義の間に何らかの意味的疏通を追究して合理化しようとする立場もある。「林蒸天帝……君也」に關しては郝懿行『爾雅義疏』(鼎文書局、民六、二頁)や錢坫夫『中国古代字典辞典概論』(商務印書館、一六六、三三頁)がそれである。章炳麟『太炎文錄』一(『章氏叢書』下冊、中文出版社、一七〇、六五頁)の「官制索隱」には「爾雅積詁曰、林蒸君也。林為山林、丞即薪蒸、是天子在山中明甚」と言い、この条の訓詁は古代の遺制を伝える問題のない資料であると見ており、同条二義の立場とは対立する。

(20) 「經文假借」、『經義述聞』三三、七五頁。

(21) 「工部尚書高郵王文簡公墓表銘」、王佩誥校『龔自珍全集』中華書局香港分局、一九四、一四頁。

(22) 「考文」の語は顧炎武『答季子德書』、『亭林文集』四(『顧炎武詩文集』中華書局香港分局、一九六、其頁)に「愚以為說九經自考文始、考文自知音」と見える。これは清学の性格を方向づけ、戴震らの考拠理念を導いた言明であった。嵇文甫はこれについて「十七世紀中国思想史概論」(『嵇文甫文集』上、河南人民出版社、一九五、八三頁)に「考文」は校勘学的事、「知音」は文字学的事」と解釈している。

(23) その理由について黄侃は「声韻通例」、『黄侃論学雜著』、一三頁に「王君不悉举『說文』本字、蓋有二故：一者、兩字音義小殊、此字雖從彼變、若無

左証、不肯輒斷為同；二者、音理內周、義多聯屬、一通假字既指一文以為本字矣、雖更舉一文以為本文、亦可成立、徒滋糾紛、難定疑惑；故寧闕而不說、斯其謹也」と分析する。しかし本質的には王念孫はすでに「広雅疏証序」に「就古音以求古義、引伸觸類、不限形体」と言うごとく、文字の形体という書記レベルを突き抜けて文献を音声言語のレベルに還元して考察する視点を獲得していたのである。王力は「訓詁学上的一些問題」(『龍虫並雕齋文集』第一冊、中華書局、一九〇、三三頁)で「它擺脫了文字形体的束縛、把語言跟詞義直接聯繫起來」と言い、洪誠も「訓詁学」(江蘇古籍出版社、一九四、六五頁)で「王念孫作『廣雅疏証』以語言駕御文字、所以不談造字本義」と的確に指摘している。

(24) 「同音借用字」「同源通用字」については陸宗達・王寧「訓詁方法論」中国社会科学出版社、一九八、一三頁に詳しい。汪耀楠「王念孫・王引之訓詁思想和方法的探討」、復印報刊資料「語言文字」一九五、七、三三頁(原載「湖北大学学报」哲社版、一九五、一)に王氏父子の「因声求義」の訓詁を、同源と借用との二層において分析している。

(25) 「与王内翰鳳喈書」、『戴震集』、五頁。また『尚書義考』一、『戴東原先生全集』、其頁にも考拠が見える。

(26) 「光被四表」、『經義述聞』三、六頁。

(27) 「平章百姓、平秩東作 王道平平」、同右書六頁。

(28) 「經籍纂詁序」、『王文簡公文集』三、『高郵王氏遺書』。

(29) 「工部尚書高郵王文簡公墓表銘」、『龔自珍全集』、一四頁。

(30) 「經義述聞」三三、七五頁。

(31) 「七日來復」、同右書一、二〇頁。

(32) 「中州試牘序」、『王文簡公文集』三、『高郵王氏遺書』。

(33) 「答段若膺論韻」、『戴震集』、九頁。これは「与某書」、同書二七頁の「治經先考字義、次通文理、志存聞道、必空所依傍」の「必空所依傍」と軌を同じくする発言で戴震の考拠に対する基本姿勢を示すものである。しかし少し注意すれば明らかなく、これは「志存聞道」という儒者としての立場を無条件の大前提としており、すでに特定の価値の支配下にあり、決して普遍性を主張しうる「必空所依傍」ではないのである。

(34) 于靖嘉「『經伝釈詞』一詞多用的假借規律」(『詞典研究叢刊』七、四川辞書出版社、一九六、三〇一頁)では、王引之の「經伝釈詞」の虚辞の意味分

化の音韻論的背景を戴震の「転語」の理論において三〇〇例について検証し、そのほとんどが合致することを明らかにしている。

(35) 「工部尚書高郵王文簡公墓表銘」、『龔自珍全集』、二七〇頁。

(36) 段玉裁も自らの仕事を「舌人」に比す。吳省欽の名に仮託した「六書音均表序」(劉盼遂編『経韵楼文集補編』上、『段玉裁遺書』大化書局、民六所収、二五頁)に「古今語言不同。古音不明、不独三代秦漢有韵之文不能以読、其無韵之文・仮借転注音義不能知。立乎今日、而訳三代秦漢之音、是書爲之舌人也」と見える。これらの「舌人」の認識は単に言語の時間的障壁を克服しえたといった底のものに止まらず、古代の言語により書写された経書に記述されている古聖賢の意志をダイレクトに把握しうること、古代の真正なる儒学を解明できるとする積極性がその内容をなしている。

(37) 「子焦理堂先生書」、『王文簡公文集』四、『高郵王氏遺書』。支偉成『清代樸学大師列伝』(芸文印書館、民五、四頁)に程廷祚の「墨守宋学已非、墨守漢学尤非」という発言を載せる。これは宋学の批判を内在させつつ展開した清学が、漢学を墨守したのでは宋学墨守と違ふところがないことを指摘したものである。

(38) 「経義述聞序」、『経義述聞』巻首、二頁。

(39) 「経文仮借」、『経義述聞』三三、三二頁。

(40) 池田秀三「訓詁の虚と実」(『中国思想史研究』四、京都大学文学部中国哲学研究室、二六〇)では、王引之の訓詁の在り方がすでに経学の枠を越えたとして、「大道を捨て、小学そのものを窮極の目的地としたのである」(三六頁)と断定し、これを「事実上の小学独立宣言」と言い、汪耀楠「王念孫・王引之訓詁思想和方法探討」では「王氏父子の事実説明、古代訓詁学家雖然一般地表現為依附于経学、以経学家自居、但是対有成就的“経学家”的訓詁、我們毋寧說他們實際上是以前経籍為剖析的對象、在做語言学的研究」(三六頁)と言い、その訓詁における言語学的批判に十分耐えうる合理的方法論の獲得への過程やその優れた成果に注目して、現象的には経学を突き抜けた言語学的研究であったと見ている。王力『中国語言学史』(山西人民出版社、一六二、もと北京大学での一九三〇年の講義で原載は「中国語文」一九三二四では、「段・王二氏は乾嘉学派的代表、他們的著作是中国語言学走上科学道路的里程碑」(二六頁)と歴史的なレベルでその科学性獲得の意義を認めているが、その研究は結局経学の枠内に止まり「終于為框子所制限、語言学不能独立起来成

為一種科学」(二五頁)とその評価を慎重に下している。王念孫は「説経者期於得経意而已」と説き、王引之は「惟求合於経文」と表現してそれぞれの考拠の営為における究極的な価値判断の根拠と考拠の目的との所在を明らかにしている。いずれも経書の記述それ自体を経学の根源と見做し、その限りにおける最大限の合理的な小学研究を展開し、言語学上の法則や理論として評価すべき偉大な成果を残したのである。しかしそれは飽くまでも錢大昕が「訓詁者義理之所由出、非別有義理出乎訓詁之外者也」(『経籍纂詁序』、『潜研堂文集』二四)と清代考拠学における訓詁研究の本質を示した、その枠組の内に在ったのである。したがって殷孟倫が『子雪郷人類稿』(齊魯書社、一六五、三六頁)で、段玉裁が行った王念孫の訓詁への解説に対し「很能説明王氏在語言文字研究中所採取的合理方法、雖然他的最終目的在“得経義”、在認識問題上有很大的局限性」と説くのは妥当なものである。ただ今日からは後知恵として「局限性」と批判することができる「得経義」が、実は儒学としての考拠に強く作用したからこそ、経義を射程とした合理的方法論の獲得が徹底して追究されたことを忘却するわけにはいかない。

(41) 龔自珍によって記録された王引之の発言が、もし後世額面通り理解されたならば、王引之の学問の實際を誤解させることになるとの危惧を王引之の子の王寿同が表明している。「工部尚書高郵王文簡公墓表銘」の注として『龔自珍全集』四九頁に見える。

(42) 王力「略論清儒的語言研究」、『龍虫並雕齋文集』三、三三頁で清儒の考拠学における批判すべき側面について規定した語である。